

---

# 軍需産業

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

軍需産業

### 【Nコード】

N0287Z

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

軍需産業は採算が取れない、だから企業としては撤退するつもりだった。しかし政府の方針で。星河の覇皇の世界を舞台にしますが現実にもあるお話でしょう。

## 第一章

### 軍需産業

連合の日本にあるだ。川口重工という企業ではある問題が起こっていた。

その問題は何かというのだ。ある産業に関するのだ。

この産業についてだ。役員達は社長である川口悠人にだ。口々に話していく。

「設備投資が異常にかかりますし」

「技術投資も馬鹿になりません」

「ですが市場は限られています」

「そのことはもう御存知ですよね」

「知っているから今君達に来てもらった」

初老の男だ。恰幅がよくしかも温厚そうな顔をしている。彼がその川口悠人だ。川口重工の創設者の一族でありだ。父から社長の座を受け継いでいる。

温厚な人物であり人格円満、気品があるとされている。バランスの取れた経営で知られており部下の育成には定評がある。

その彼がだ。昔から知っている役員達に口々に言われていたのだ。

「採算という点では」

「正直お話になりません」

「傘下の川口石鹼や川口運輸は順調に業績を挙げていますし」

「重工自体も航空機や車が好調です」

「ですがあの分野はです」

「どうにもなりません」

「こう言うのである。」

「所有している球団は確かに赤字続きですが」

「それでも。あれは我がグループのいい看板ですから」

「採算は充分に取れています」

「しかしあの分野といますと」  
「何か差し引きゼロにしている状況です」  
「そのゼロにしている状況も」  
川口が重い口を開いて述べた。  
「製品自体を高く売っているからだな」  
「はい、手造りと言ってもいいあれをです」  
「あれを売ることによってですから」  
「国民からは批判の対象です」  
「何しろ税金が関わっていることですから」  
「そうだな。国民、ひいてはお客さんが怒るのも当然だ」  
川口は深刻な顔になった。普段は温厚な顔をそうさせてだ。  
そのうえでだ。こう言うのだった。  
「我がグループへのイメージダウンにもなるな」  
「そうです。なりかねませんし」  
「我がグループのお荷物になりかねません」  
「ですからあの分野からはです」  
「撤退すべきだと思います」  
「確かにな」  
川口も腕を組み難しい顔になってだ。  
そうしてだ。役員達に述べた。  
「軍需産業というものはな」  
「サハラでもその様ですが」  
そのだ。彼等がいる連合の隣で千年もの間戦乱が続いているその  
サハラでもだというのだ。軍需産業というものはだ。  
「採算が取れません」  
「設備投資も技術投資も維持費も莫大ですが」  
「市場が限られていますから」  
「軍艦を売るより歯磨きの方が遥かに採算が取れていますし」  
「歯磨きは誰もが使う。だが軍艦はそうではないのだ。」  
「あの産業からはもう撤退してです」

「芸能プロダクションでも持ちますか」

「芸能プロダクション。いいな」

川口もだ。役員の一入のその言葉に応えた。

そしてだ。こう言ったのだった。

「ではシュミレーションしてくれ」

「軍需産業から撤退した場合ですね」

「株価への影響と採算の予測」

「そして技術者や設備の民間産業への転嫁の推移とそれがもたらすもの」

「そうしたことを」

「あと芸能プロダクションのシュミレーションもだ」  
それもするというのがだ。

「アイドルグループを持つのもいいな」

「はい、男性アイドルもいいですし」

「女性アイドルも」

「子役を育てるのもいいかと」

俄然だ。彼等の話が動きだした。

## 第二章

「芸能プロダクションはグループ全体の看板にもなりますし」

「しかも自社で広告のモデルを育てることも可能です」

「芸能プロはいい分野です」

「球団とのコラボレーションもできます」

「その通りだな。では軍需産業から撤退しよう」

あっさりだ。このことが決まったのだった。

川口はそのことについて清々しい気持ちになった。軍需産業は彼にとっても頭を抱える赤字分野だったのだ。それで良かった。

本当にあっさり撤退を決めた。しかしだ。

その話を聞いた当時の日本の国防長官である八条義統はだ。難しい顔をしてだ。

スタッフ達にだ。こう話したのだった。

国防省の執務室で執務を執りながらだ。彼は述べた。

「困ったことですね」

「はい、川口重工は優れた兵器を提供してくれますし」

「それに我が国で兵器を開発している数少ない企業です」

スタッフ達も話す。

「ですから彼等の撤退はです」

「国防省としては何とかしたいです」

「思い留まって欲しいです」

「その通りです」

まさにそうだとだ。八条も言った。

それでだ。スタッフ達にあらためて述べた。

「彼等を説得しましょう」

「はい、そうですね」

「そうしましょう」

スタッフ達も彼と考えは同じだった。こうしてだ。八条は彼の上

司である総理大臣と電話での話をしたうえで正式に決めてだ。

国防省としては慰留ということでは決まった。しかしだ。

川口重工側はだ。それを聞いてだ。

また役員会を開きだ。そうして話すのだった。その話すことは。

「ですから採算が取れないですから」

「採算の取れない、しかも税金を使う為評判の悪い分野を持っているのはです」

「企業にとって好ましいことではありません」

「そうだというのに」

しかしだ。それでもだ。国防省は言ってきたのだ。

「それでどうして国防省は慰留するのか」

「企業としてはそうした分野は不要です」

「他の有望な分野に進出したいというのに」

それが芸能プロだった。

「若しくは既に収益を挙げている分野へのさらなる投資」

「それが普通ですが」

「しかし国からストップがかかるとは」

「困ったことです」

「それを言ったのは八条グループの御曹司だったな」

川口がここで言った。

「あの方だったな」

「はい、八条義統さんです」

「あの方が長官です」

「政治家としてもかなり優秀な様ですね」

「既に実績を挙げておられます」

「何度か御会いましたこともある」

川口もだ。彼のことは個人的に知っていた。経営に携わる者同士としてだ。交流があるのだ。

これが家ぐるみの付き合いでだ。だからそれなりに年季のある交流である。川口は今はこのことを思い出してだ。そうして役員達に

話すのだった。

「私がおつか」

「国防相とですか」

「会われますか」

「そうしようか」

「こう話すのだった。

「それで事情を話してだ」

「納得してもらいますか」

「国防相に」

「我々にも我々の事情がある」

企業側のだ。

「何時までも採算の取れない分野にいても仕方がない」

「はい、技術者を他の分野に配置転換すれば大きいですし」

「工場の労働者達も車や飛行機の製造に行ってもらいたいですしね」

「ただでさえあちらは人手が足りませんし」

「ですから」

「納得してもらおう」

何としてもだというのだ。

### 第三章

「是非な」

「はい、それでは」

「御願います」

こうしてだった。川口は八条と会い話をする事になった。その八条もだ。

川口から話をしたいとの連絡を聞いてだ。すぐにだった。

私設秘書の由良にだ。移動中の車の中でだ。こう話した。

「では受けよう」

「受けられますか、この会合」

「こちらから話そうとも思っていた」

彼の方でもだ。考えていたというのだ。

「好都合だ」

「では場所は」

「料亭がいいか」

「料亭ですか」

「川口社長とのお付き合いは長い」

それこそだ。彼が幼い頃から知っている。幼い頃はいつもプレゼントを暮れて温かい笑顔を向けてくれる優しいおじさんだった。

その彼と話すからだ。それでだというのだ。

「馴染みの店でだ」

「ゆつくりとですね」

「お話したい。だからだ」

「御二人の馴染みの料亭といたしますと」

「砂原か」

日本の首都でもだ。有名な料亭の一つだ。懐石料理で知られている。

「あそこで御会いしようか」

「砂原で、ですね」

「そうしたい。あの店でどうか」

「わかりました」

すぐに答えた由良だった。そうしてだった。

川口との話の調整が裏方で行われた。その砂原で会うことになった。

ある日の夜だった。二人はだ。

奥座敷の部屋で向かい合っていた。黒檀の卓を囲んで座布団に座っている。

部屋は襖と障子で仕切られ水墨画の掛け軸に見事な白い壺がある。

天井は高く白い木だ。畳は新しくまだ緑色である。

その落ち着いた部屋の中でだ。二人はだ。

まずは笑顔で会釈をした。それからだった。

運ばれて来る料理を食べながらだ。話をするのだった。

「お久し振りです」

「はい」

川口が笑顔で八条の言葉に応える。

「如何お過ごしでしたでしょうか」

「特に何の変わりもなく」

川口は温厚な笑顔のまま八条に応え続ける。本来はもっとくだけたやり取りができる関係だが相手は大臣だ。だからあえて畏まっているのだ。

そのうえでだ。川口は。

世間話、歌舞伎やオーケストラの話をしてからだ。徐々にだ。

話を本題に進めた。そこで言うのだった。

「実はです」

「何でしょうか」

八条は彼が何を言うのかわかっている。しかしだ。

それは表には出さずにだ。聞く感じて応えた。

「今日ここでお話されることは」

「今我が川口重工では企業全体の再編成を考えています」

「分野の刷新ですか」

「進出する分野と撤退する分野を検討しています」

「成程」

「それで、です」

ここまで話してだった。あらためてだ。

彼はだ。鶏肉を野菜と共に柔らかく似てあっさり味付けをしたものを食べながらだ。八条に対して静かに言ったのである。

「軍需産業については」

「どうされるおつもりでしょうか」

「撤退を考えています」

あえてだ。川口は単刀直入に述べた。

「そうしたいのですが」

「では艦船や艦載機は」

「全てです」

「撤退されたいのですか」

「そう考えています」

こう八条に述べたのだった。

## 第四章

「それをお伝えしたく参りました」

「そうですか。それではです」

「それでは？」

「実は国防省もです」

駆け引きだった。それが既にはじまっていた。

だがそれをお互いに表に出さずだった。

八条はだ。こう川口に話した。

「今考えていることがあります」

「考えていることですか」

「アメリカのクロワーズグループに」

軍需産業で有名なグループだ。無論その他の多くの分野でも有名になっている。軍需産業だけでやっていっている企業というのもない。

「受注を検討しています」

「クロワーズ!？」

クロワーズと聞いてだ。川口は。

思わず箸を止めた。何故ならだ。

このグループは多くの分野において川口重工と競り合っているからだ。所謂ライバルグループだ。彼にしては負けるにはいけない相手だ。

その名前が出たからだ。川口は箸を止めたのだ。

それでだ。彼は八条に問うた。

「あのグループと契約して」

「政府としてもです」

話が大きくなった。軍事だけではなかった。

「他の分野での便宜も考えています」

「他の分野でもですか」

「軍需産業だけでなく」

八条はさらに言った。

「箸やダム建設」

「それもですか」

「他にも。様々な分野で」

つまりだ。採算の乏しい軍需産業だがそこを突破口にしてだ。クロワーズグループは日本に進出を計ろうとしているということだ。それを聞いてだ。

川口は顔を曇らせた。そしてだ。

八条に対してだ。こう言うのだった。

クロワーズがそうなるなら川口重工はどうなるか。そのまま裏返しになることだ。そのことを瞬時に察してだ。彼は言ったのである。

「少し考えさせて下さい」

「軍需産業についてですか」

「はい、考えさせて下さい」

こう八条に言ったのだ。

言葉は何とかうわづらないうようにさせて感情を見せない様にしてだ。

彼はだ。言った。

「暫くの間」

「そしてですね」

「また御会いたいのですが」

「わかりました」

八条も表情を消して応える。あえてだ。

そのうえでだ。川口に述べたのだった。

「ではその時にまた」

「連絡しますので」

「御待ちしています」

こう話したのだった。こうしてだ。

この時はこれで終わった。しかしだ。

翌日だ。すぐにだった。川口は役員達を集めてだ。

また会議に入った。そこで昨日の八条との話のことを説明した。しかしだ。

役員達は口々にだ。苦い顔で言った。

「ですが採算がです」

「取りにくいですから」

「軍需産業はもう」

「撤退すべきですが」

「しかしだ」

ここでだ。川口は言うのだった。

「クローズグループが来るといふのだぞ」

「政府関連で様々な分野にも進出するといふのですね」

「政府が便宜を計って」

「そうだ。あのグループがだ」

川口重工のライバルグループがだといふのだ。

「来るといふのだ」

「少し情報を確認しましょうか」

「そのことについて」

「調べてくれ。しかしだ」

それでもだといふのだ。川口は。

## 第五章

「それと共にだ」

「軍需産業についてですか」

「どうするかを検討しますか」

「無論撤退も考える」

それはやはり念頭に置いていた。しかしだ。

念頭に置けるものは一つではない。あらたにこのことも置くとい  
うのだった。

「だが。存続もだ」

「考えていくのですか」

「それもまた」

「そうだ。ただしだ」

ここだ。川口は役員達に話した。

「それならそれで政府には色々と便宜を計ってもらおう」

「採算の取れない分野の製品を政府に提供する代わりに」

「それと共にですね」

「それなら事業を拡大できだ」

それと共にだった。

「人も増やせるからな」

「政府の肝いりとしてですね」

「それも我が国の政府の」

「日本政府の」

「そうだ。技術者も労働者もだ」

その人手不足が懸念されていたソフトウェアもだというのだ。

「だからだ。考慮していくべきだ」

「それが我がグループ全体の利益になるなら」

「ならばですね」

「その通りだ。まずはクローズグループについての調査だ」

本当にだ。日本に入って来るかどうかだということについてだ。

「調べてくれ。いいな」

「はい、わかりました」

「それなら」

こうしてだった。まずはだ。

クロワーズグループについて調べられた。その結果だ。

そのことは事実だった。確かにだ。

日本政府、つまり国防省はだ。クロワーズグループに兵器の契約を打診していた。そしてそこから様々な分野での便宜もだ。

それも確かだった。そのことを確めてだ。

川口は決断を下した。それは。

「軍需産業を続ける」

「そうしてですね」

「そのうえで」

「そのクロワーズグループに便宜を計ろうという分野」

それについてもだった。

「我々が取るぞ」

「そうしてさらなる利益を手に入れますか」

「軍需産業から」

「採算の採れない分野でもだ」

それでもだというのだ。そこからでもだ。

「テコにしてそうしてだ」

「収益を得るのがですね」

「ビジネスですね」

「今回がそれだ。ならだ」

「はい、軍需産業は存続させましょう」

「そのうえで」

他の分野での利益を挙げるというのだった。こうして川口重工の軍需産業からの撤退はなくなった。

このことはすぐに八条にも伝わった。彼はそのことを移動中に聞

いた。鉄道の個室において話を聞いた。彼の向かい側の席には由良がいる。由良が彼に報告したのだ。

「ということですか」

「そうか。続けてくれるか」

「正式に決めました」

「よし。話は奇麗にまとまった」

八条はここまで聞いてだ。その整った顔に笑みを浮かべた。そしてだ。こう由良に話した。

「実は全て決まっていたのだ」

「全てとは？」

「川口重工の得意分野は多い」

そのだ。川口重工についての話からはじめたのだった。

「建設やコンピュータ関連と」

「化粧品等の他にも」

「あのグループはいいグループだ」

客観的に見てだ。そうだというのだ。

「だから。そうした分野でだ」

「政府としても仕事を頼みたかった」

「当然軍需産業でもだ」

「だからですか」

「クローズグループに話を打診してだ」

「そのうえで川口重工に決断を促したのですか」

「成功した」

八条の考えがだ。そうだったというのだ。それは。

「総理の御考えはな」

「長官の御考えではなかったのですか」

「そうだ、総理のだ」

日本の内閣総理大臣であるだ。伊東のだというのだ。小柄ながら才媛として知られ辣腕家として国内からも国外からも警戒もされている。

全てはその彼女のだ。考えだというのだ。

「クロワーズグループにも食品産業での許可を出すか」

「クロワーズバーガーですね」

「そのさらなる進出の話は取り付けた」

「それは見返りですか」

「川口重工への当て馬になってもらったことにな」

「ううむ、深いですね」

由良は伊東のだ。見返りまで考えていた深謀にだ。思わず唸った。

その彼にだ。八条は話した。

「私は川口重工が撤退することを恐れていたがだ」

「総理は違いましたか」

「その話を逆に利用されてだ」

「そこまでされたのですか」

「政治は色々なやり方がある」

八条はまた言った。

「中にはこうしたやり方もあるということだな」

「一つの分野には留まらないというのですね」

「川口重工の軍需産業からの撤退を止め」

さらにだった。

「そして各分野に進出してもらいグループとしても発展してもらおう」

「それがそのまま雇用の確保にもなりますし」

「国家の発展にもなる」

「そこまでつなげることなのですね」

「そうなるな。私としても勉強させてもらった」

八条は唸る様にして言った。

「政治には色々なやり方がある」

「そして目的を実現させていくこともですね」

「そうしたことがわかった」

こう話すのだった。そうしてだ。

彼は鉄道で目的地向かうのだった。彼がまだ日本の国防相だっ

た頃の話だ。そしてこうした経験がだ。彼を中央政府初代国防長官として辣腕を振るわせることになったのだ。まさに政治であった。

軍需産業 完

2011・8・31

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0287z/>

---

軍需産業

2011年12月1日01時47分発行